



一般社団法人
全国訪問看護事業協会
The National Association
for Visiting Nurse Service

訪問看護 ステーションニュース

特集

訪問看護ステーションニュース30周年記念座談会 前編 P8

伝えたい、これからの訪問看護～広報・編集委員から～

No. 188

2026年 1月号

目次	・新年挨拶 P2	・訪問看護ステーションへのメッセージ P10 ～在宅医療を支える医師の立場より～
	・訪問看護ステーションのご紹介 鹿児島県から P5	・第3回 訪問看護と「日常倫理 (everyday ethics)」 P12
	・令和7年度 都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等 交流会ブロック会議 検討報告 P6	・第10回 訪問看護における家族看護について P13
	・管理者養成研修会後の取り組み P7	・編集後記 P14

表紙協力＝鹿児島県訪問看護ステーション協議会



研修風景
事業所自己評価ガイドラインの研修を定期的に行っています。



令和7年度 都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等交流会ブロック会議 検討報告



当協会では、毎年「都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等交流会」を開催し、地域別に分かれてブロック会議（以下ブロック会議）を行っています。今年度は令和7年7月16日に開催し、「2040年に向けた都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等のあり方」について活発に議論されました。その会議で話し合われた内容と、当協会で行っている支援や事業についてご報告します。

管理者の質向上に向けて

訪問看護未経験者が管理者となるケースが増えており、適切なマネジメントが課題となっています。この状況を受け、引き続き当協会でも訪問看護管理者研修を開催し、質の高いマネジメントができる管理者の育成に努めます。

当協会で行っている支援や事業

【研修会】訪問看護管理者研修ベーシックI、訪問看護管理者養成研修会
…実施済（2026年度は16ページ研修一覧をご覧ください）



訪問看護事業所の質向上に向けて

新規の訪問看護事業所（以下事業所）の増加に伴い、サービスの質の確保が重要な課題となっています。当協会では「事業所自己評価ガイドライン第2版」の普及のため、鳥取県・三重県・神奈川県での研修会講師を務めました。さらに、時流に即した内容と使いやすさを見直し、第3版を作成しています。自己評価ガイドラインを活用し、事業所で質向上に取り組んでいただくために、周知方法やインセンティブの工夫も併せて検討します。

当協会で行っている支援や事業

【ガイド】訪問看護ステーションにおける事業所自己評価
ガイドライン（第2版）（令和8年度4月に第3版改訂）



事業存続を支えるDX化の推進

管理者の後継者不足や職員不足、利用者減少など、事業存続に関わる課題に直面している事業所が増えています。この状況を改善するため、訪問看護ステーションにおけるDX化を推進し、業務の効率化を図ります。当協会では、DX・ICT推進のためのサポートブックや事例集を作成しました。

当協会で行っている支援や事業

【ガイド】訪問看護ステーションのDX・ICT
推進のためのサポートブック



【事例集】訪問看護事業所存続のための工夫や
取り組みの事例集



むすびに

ブロック会議を通じて、訪問看護ステーションの課題は多岐にわたることが改めて確認されました。当協会では、次年度はブロック毎に開催されている交流会を通じて、地域ごとの課題の情報収集を行う予定です。課題に対応できる体制を構築できるよう、質の向上、事業存続支援、災害対策等に取り組んでまいります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

災害に強い訪問看護体制の構築

令和6年能登半島地震で、石川県では事業所と市町が事前に協定を結んでいたため、避難所への訪問が可能となり、利用者に必要な支援を提供できました。今後も具体的な事例を共有し、各地域での検討を促進します。

当協会で行っている支援や事業

【研修会】訪問看護ステーションにおける事業継続マネジメント（BCM）と事業
継続計画（BCP）…実施済（2026年度は16ページ研修一覧をご覧ください）



【ガイド】訪問看護ステーションの災害、
新興・再興感染症発生時の地域連携ツール



訪問看護ステーションにおける
業務効率化と地域連携の好事例集



【その他】日本訪問看護財団 災害時ネットワークの紹介



訪問看護総合支援センターとの連携

都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等（以下協議会）と訪問看護総合支援センターとの連携状況は、都道府県によって様々な状況にあります。当協会では、各県の状況を共有する場としてブロック会議を継続して開催し、各地域での連携強化につなげます。

当協会で行っている支援や事業

都道府県訪問看護ステーション連絡協議会等交流会 ブロック会議

協議会加入率向上への取組

事業所数は増加している一方で、協議会加入率が低下している都道府県が多く見られます。また、役員のなり手不足も課題となっています。

当協会の取り組みとしては、ステーションニュースで協議会の活動を紹介しています。また、事業協会の会員案内のチラシに、協議会の加入案内も加えて配布しています。報酬改定等の説明会や事業所申請時に、都道府県のご協力を得ながら、協議会加入の案内を進めてまいります。

当協会で行っている支援や事業

協議会の加入案内

伝えたい、これからの訪問看護 ～広報・編集委員から～

司会・参加 椎名 美恵子（訪問看護ステーションみけ管理者）[東京]

参 加 加藤 小津恵（訪問看護ステーション西陣所長）[京都]

木村 浩美（熊本機能病院医療連携部課長／
ホームケアサポートセンター副センター長）[熊本]

福本 美津子（有限会社だいち代表取締役）[三重]

中島 朋子（東久留米白十字訪問看護ステーション所長）[東京]

松浦 千春（ないとうクリニック訪問看護ステーション管理者）[宮城]

開催日 2025年12月5日

会場 全国訪問看護事業協会



本誌30周年記念として、広報・編集委員が参考し、訪問看護の豊富な実践から大切にしてきたこと、楽しさ、つらかった経験も率直に語り、これからの訪問看護に向けた座談会を開催。前後編の前編



椎名 美恵子
訪問看護ステーションみけ管理者

椎名 本日はお忙しいところ、座談会にお集りいただき、ありがとうございました。皆さんには、普段から広報・編集委員としてご活動いただいているわけですが、経験豊富な訪問看護師であり、管理者でもあります。そういったご経験から、お話をいただければと思います。

訪問看護の実践で大切にしてきたこと、心に残っているエピソード

椎名 早速ですが、まず皆さんにお聞きしたいことは、これまで何を大切に訪問看護の実践をしてきたか、またそういう中で心に残っているエピソードがあれば、お聞かせいただけますでしょうか。

木村 私の経験からお話しますと、在宅で仕事をすることで視野が広がったということがひとつあります。30年前のケースですが、洞不全症候群の利用者さんがいました。利用者さんをずっと介護していたのはお嫁さんです。利用者さんは義理の母ですね。在宅で看取りまでできたのですが、最期を息子さんの腕の中で迎えられて、私たちもご家族とともに本当によいケアをさせてもらったと思えたケースでした。

訪問看護も終了してご家族に「長い間お世話になりました」と挨拶をさせていただいたときです。お嫁さんが「義母のことはもちろんですけど、ずっと私の心のリハビリをしてもらっていました。ここまで続けられたのは訪問看護師の皆さんのおかげです」とおっしゃったのですね。私たちが家族のために何かをしたということを、あまり意識せずに関わっていたところに、お礼をいただいたので驚きました。彼女は「訪問看護師さんに、声をかけてもらったことや、肩にポンと触れてもらったことで、心がからからに乾いて力が出ないような、心の器の中で、もう消えてなくなりそうな水が、訪問看護師さんの言葉で溢れ出すぐらいの力になって、またそれが減ったり増えたりを繰り返しながら、ここまで介護を続けることができました」と話してくれました。

この言葉をいただいたときに「これは楽しい！ なんてやりがいのある仕事だ」と感じました。在宅では利用者さんだけではなく、ご家族や支援される方々にも目を向け、かかわりを持っていくという意味で視野が広がりましたし、在宅は、私たち看護師、もちろん利用者、支援される方々もそうですが、本当に心からよかったと思えるケアを実現できる場所もあると思います。

加藤 私が大切にしていることは「その方が大事に、大切にされていることを一緒に大切にする」ということです。10年以上前ですが、男性同士のペアの方の終末期にかかりわることがありました。利用者さんはお話をあまりできない状態でしたが、介護されているパートナーの方は言葉が荒く、巻き舌の口調になることも多くあり、スタッフも怖いという印象を持っていたんです。



木村 浩美
熊本機能病院医療連携部課長／
ホームケアサポートセンター副センター長

でもその方も利用者さんが大事で、その中でどうにか頑張っているんだ、ということを心に留めながら、危機が何度もあったのですが、一緒に乗り越えて、寄り添っていく中で…でも、きっと最期を迎えて、息を引き取る場面では「てめえら看護師やのにわからへんかったんか!」と巻き舌で罵られるんじゃないのかなと身構えていました。

ある日「様子がおかしいから見に来て」と連絡があり、訪問すると利用者さんはお亡くなりになっていたんですね。呼吸が止まっているのを確認して、その方をお呼びしました。すると「加藤さん、あなたたちが毎日来て、僕を支えてくれたから、思ったように送ることができたよ、ありがとう」と言われたんです。

利用者さん、そのパートナーの方が大切していることを、私たちもまた一緒に大切にしてきたこと、そうやつて支援してきたことは伝わるっていうのだとthoughtいました。こういう経験は、私たち自身も報われるというか、この仕事をやっていてよかった、次もがんばろうという気持ちにさせてくれます。



加藤 小津恵
訪問看護ステーション西陣所長

訪問看護の楽しさ！

椎名 ありがとうございます。お二人とも訪問看護の醍醐味が伝わるお話だったと思います。そこで、改めて訪問看護の楽しさはどんなところでしょうか。私は訪問看護をはじめて26年になるのですが、生活の場にお邪魔して、その方の生き方、何を大切にしてどう生きていきたいかを知り、オンリーワンの看護に楽しさを感じています。ほかの方や、若い世代にも伝えるにはどのようにしたらよいか、ご意見をお聞かせください。

松浦 やっぱり在宅だからこそ経験できます。訪問看護は箱の中に入ってる仕事をするのではなく、職場を飛び出して、お家までお伺いして、いろんな楽しいこと、悲しいことも経験して、ステーションに帰ってくる。体験談を発信することや同行訪問で経験してもらうことで、訪問看護の楽しさが伝わっていくのかと思います。大切にしているのは、自分自身が楽しむこと、楽しさを伝染させるという思いで伝えるようにしています。

福本 楽しいという言い方ではないかもしれません、人生の終末期、その時間を家族以外が一緒に過ごすということは、看護師や医者などでなければ経験できないと思います。私はその場面がとても貴重で、非常にいい時間を一緒に過ごさせていただいていると思っています。終末期に、毎日訪問して感じることは悲しみだけではないですね。私たちも周りにおられる方も決して悲しみだけではなく、一緒にその時間を過ごせる充実感というか、看取れてよかったという気持ち、こういった体験はやっぱり訪問看護にしかないのだと思います。

後輩に、どう伝えるかとなると、同行訪問になると思います。訪問後の車中などで、今、体験したケアについて利用者や家族の心の機微等を言葉にしていくことで、学びが深くなっているように思います。

椎名 いくら話で伝えるより、実際に一緒に同行してもらって、一緒に看護するということが大事だと思います。同行訪問ということでは、病院の看護師が研修などで訪問看護ステーションに来ることもありますが、どのようなことをお伝えしていますか？

木村 病棟から来た看護師さんはいつも大体泣いて帰ります。

椎名 泣いて帰るのですか？

木村 そうなんですよ。何かしら感動して、最後の反省会の時に大体泣いちゃったりします。私たちが訪問すると利用者さんは「ありがとう」と言ってくれるのですが、病院で治療を終えた患者さんの「ありがとう」は、病気を治してくれたことやいろいろなことへの感謝かもしれません。訪問看護では、利用者さんが看護に対して「ありがとう」と言ってくれる。看護の喜びを久しぶりに感じたという感動なのかもしれません。

中島 私のステーションにも病院から研修にいらっしゃいますが、先ほど、加藤さんが「利用者さんが大切にしていることを大切に」とおっしゃったけど、訪問看護では何気ない会話であっても、相手に寄り添っているところに感動したということを聞きました。病院で私たちは何やっていたのだろうと思う方もいるようです。

加藤 研修で訪問看護ステーションに来た病院看護師と同行訪問すると、利用者さんから私たちが来るのを「待っていたよ」と言われることに、驚くようです。



松浦 千春
ないとうクリニック
訪問看護ステーション管理者



福本 美津子
有限会社だいち代表取締役



中島 朋子
東久留米白十字
訪問看護ステーション所長

後編に続く

後編では、さらに訪問看護の楽しさを語る、辛いことがあっても立ち直る力、今訪問看護の現場では?
これからへのメッセージなど